

氏名	守 屋 有 二
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第2964号
学位授与の日付	平成8年3月25日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	先天性股関節脱臼に対する観血的整復術直後の求心性の 評価
論文審査委員	教授 折田 薫三 教授 村上 宅郎 教授 平木 祥夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

先天性股関節脱臼に対する観血的整復術の術後成績を左右する因子として、術直後の股関節内旋外転位における求心性の良否が重要であるが、この求心性は今まで主観的に評価されてきた。本研究では求心性を客観的に評価する目的で、X線学的にY線から大腿骨頸部上縁までの距離をl値、坐骨内側壁から骨幹端の最内側までの距離をm値、大腿骨頸部軸延長線と坐骨内側壁との交点からY線までの距離をn値と設定し、術後成績との関連とその妥当性を検討した。1歳以上2歳6カ月以下の年齢に観血的整復術を行い、12歳まで追跡できた44例50股（男7例8股、女37例42股）を調査した結果、l値、m値、n値のいずれも成績良好群と不良群との比較で有意差を認めた。また、n値が大であるほど12歳時C/E角は良好である正の相関も認められた。l値、m値、n値は術直後の求心性評価に有用であり、l値4mm以上、m値17mm以下、n値5mm以上であれば成績は良好となることが判明した。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

先天性股関節脱臼の観血的整復術の予後因子として最も大切な求心性に対する客観的な評価法がない。そこで本研究者は、X線学的に両腸骨の最下端を結ぶY線から大腿骨頸部上縁までの距離をl値、坐骨内側壁から骨幹端の最内側までの距離をm値、大腿骨頸部軸延長線と坐骨内側壁との交点からY線までの距離をn値とし、44例50股につき計測し、長期予後との相関を検討し、l、m、n値は術直後の求心性評価に有用なことを証明している。臨床上極めて有用な評価法を開発したもので、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。